

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520497

研究課題名(和文) ヴァレンス拡大とその形態統語論的実現に関する日・英・独語間の語彙意味論的比較研究

研究課題名(英文) A lexical-semantic approach to valence expansion and its morphosyntactic realization in comparative studies in Japanese, English and German

研究代表者

藤縄 康弘 (FUJINAWA, Yasuhiro)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：60253291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：日本語(基本語順SOV, 対格・与格の区別あり, 主語の表示義務なし), 英語(基本語順SVO, 対格・与格の区別なし, 主語の表示義務あり), ドイツ語(基本語順SOV, 対格・与格の区別あり, 主語の表示義務あり)という相互に部分的に共通する形態・統語論的性質を備えた3つの言語の研究において, 従来, 個別言語研究の枠内ではばらばらに取り上げられてきた諸構文のうちから, 「ヴァレンス拡大」という観点で相互に比較可能なものを洗い出し, その背後に「イベントの所有」という意味論的基盤が認められること, および言語による実現形式の異なりが, 主として一致形態論やアスペクトに依存することを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Japanese, English and German have morphological and syntactic properties "partially" in common; while Japanese and German have SOV-type word order, where accusative and dative cases are marked distinctively, English has SVO-type word order, and does not have such a distinction in case marking. On the other hand, subjects must be realized overtly in English and German, while subjects need not be realized overtly in Japanese. Through the comparative studies of these three languages, we have suggested that a range of grammatical phenomena, which have been mainly regarded as language-specific properties so far, can be analyzed and formalized uniformly under the notion of "Valence Expansion". Also we have clarified that the semantic notion of "Possession of Event" typically triggers valence expansion in these languages, where the ways of argument realization are determined chiefly in accordance with the agreement morphology and aspectual properties in the lexical representation of verbs.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：言語学 語彙意味論 日本語 英語 ドイツ語 所有 与格

### 1. 研究開始当初の背景

従来の語彙意味論の研究では、使役と反使役・脱使役の交替関係に多くの関心が注がれてきた。この交替関係の背後には、基盤的な意味関係として使役 CAUSE が設定され、この CAUSE 関数を起点として、語彙意味的な交替現象が捉えられることが多い。特に、使役的關係をそのまま表す表現が通言語的に他動詞構文で現れる一方、反使役・脱使役の表現は統語論的には自動詞化された構文で実現されるとはいえ、言語によって動詞の形態論が異なる（日本語では接辞を伴う、英語では純粋な自動詞形態、ドイツ語では再帰代名詞を伴う、など）。このため、使役と反使役・脱使役の交替関係では、他動詞構文による使役の表現が基本とされ、反使役・脱使役の表現は意味論的な動作主抑制の帰結として生じるものと位置づけられてきた。つまり、語彙意味論においてはヴァレンス縮小の理論が主流をなしてきていると言える。

これに対しヴァレンス拡大については、個別言語的にも通言語的にも、語彙意味論的に未解明の点が多い、あるいは、そもそも課題を課題として認識していない状況が大勢であった。例えば日本語において、受動態が直接受動と間接受動とに大別され、後者がヴァレンス拡大の表現であることは周知の事実だが、この受動態の解釈については意味論的というより、語用論的に説明されることが多かった。また、いわゆる「自由な」与格が重要なヴァレンス拡大表現となっているドイツ語においても、この与格の意味はおおむね分類学的に記述されるに留まっていた。

とはいえ一部の研究成果からは、日本語の間接受動とドイツ語の「自由な」与格が有意義に比較可能であることも推測された。これらの文法表現の間には、自動詞に適用されれば「不利益」の解釈（子供に泣かれる、mir brennt das Fleisch an “me-DAT burns the meat PARTICLE” 「肉が焦げ付く」）、他動詞に適用されれば「利益」の解釈（息子を褒められる、er wäscht mir das Auto “he washed me-DAT the car” 「車を洗ってくれる」）が出やすいという統語論・意味論インターフェース上の共通性が見出される。それだけに、言語間で異なるヴァレンス拡大表現の語彙意味論的解明が待たれるところであった。

### 2. 研究の目的

本研究課題は、このように未開拓であったヴァレンス拡大現象を語彙意味論の観点から取り上げ、使役・反使役・脱使役の場合に比べ、言語間での形態・統語論的変異が大きい諸構文の背後にどのような意味論的基盤が認められるのか、またその基盤上で当該諸構文がどのようにパラメータ化されるのかを究明することとした。

研究代表者および分担者は、日本語の間接受動構文とドイツ語の与格構文に関してすでに語彙意味論に基づく対照研究を行って

いたが、本研究課題では対象を拡大し、より包括的な言語理論構築を目指した。その際、直接的な調査対象は、日本語、英語、ドイツ語においてヴァレンス拡大のためある程度生産的に用いられる諸構文、すなわち日本語の間接受動構文、二重主語構文、英語のさまざまな使役構文（特に have 使役構文）、およびドイツ語の lassen 使役構文、bekommen 受動構文、「自由な」与格構文である。

対象言語に英語を加えたのは、これまでの予備調査を通じ、日・独語間の共通点がこれらの言語の基本語順（SOV）と格体系（構造的な対格と与格の存在）に依存する一方、両言語の相違点のほうは、日本語に存在せず、ドイツ語には存在する主語の表示義務に相関する可能性が見込まれたためである。この可能性の検証のためには、基本語順が SVO で構造的な与格を持たない反面、主語が義務的に表示される英語が比較の第三者として適格であった。また、いずれの言語においても、CAUSE に基づく語彙的使役に連なり得る統語的使役の構文を一方の極とし、ヴァレンス縮小的な受動構文に連なり得る諸構文を他方の極として、構文を選定した。

これらの構文を対象として、以下の諸点の解明に取り組んだ：

- 当該の諸構文はどの程度一定の意味論的基盤に基づいているのか、また、その基盤は語彙意味論的にどう関数化されるのか？
- そのような意味論的基盤の上で、言語による構文変異をもたらす因子は何か？
- 当該因子は互いにどう相関しているのか、つまり、諸構文はどうパラメータ化されるのか？

### 3. 研究の方法

研究対象のうち、ドイツ語は研究代表者・藤縄が、日本語と英語は分担者・今泉が分析を担当した。また藤縄は、検証に用いる枠組みの理論化とそれに基づく検証および結果の総括にも責任を負った。

研究期間3年のうち最初の2年間は経験的な基盤固めを行う時期と位置づけ、データの収集・解析や文献の渉猟を行うとともに、各年ワークショップを開催して関心を持つ研究者を集め、そこで本研究課題の進捗状況について報告することにより、建設的な意見や提案、批判などのフィードバックを得て、理論の深化をはかった。また、第2年度末から最終年度は成果発表の時期と位置づけ、国内外の学会・研究会で代表者・分担者が個別あるいは共同で成果を披露するとともに、学術誌への投稿を行った。

研究初年度にあたる平成23年度は、まず9月、研究分担者・今泉が連合王国の LAGB において、それまでに研究代表者・藤縄と共同で行ってきた予備調査で得られた成果の要

点を報告した。その後 10 月、この発表に対するフィードバック意見について、藤縄と今泉が面会して検討を行い、当初の想定を超える発展の可能性を確認した。その上で両者は予備調査で扱わなかったヴァレンス拡大現象（ドイツ語の bekommen 受動構文、英語の have 使役構文）を中心にデータの収集と整理にあたり、藤縄はその成果の一部を東京外国語大学国際日本研究センターや同大学語学研究所の定例研究会において発表した。

翌平成 24 年度は、一方で日本語二重主語構文とドイツ語与格構文、他方で英語 have 使役構文とドイツ語与格構文・lassen 使役構文を対照的に取り上げ、これらのヴァレンス拡大操作の背後に「イベントの所有」という述語関係が基盤として認められることを確認した。この知見はいくつかの研究発表会において報告・検討されたが、そこでのフィードバックをもとに、言語によって異なった表現形式を発現させる因子として、アスペクトの重要性を見通すに至った。

研究最終年度となった平成 25 年度は、対象としてきた言語のさまざまな構文現象について、一方では個別言語的な、他方では言語横断的な分析結果をまとめた。日本独文学会の研究発表会において研究代表者と分担者が揃ってシンポジウムを企画・開催したのをはじめ、いくつかの学会での発表や雑誌論文・図書を通じ、成果を共同または単独で公開した。

#### 4. 研究成果

(1) 上述の「研究の目的」に直接的に対応する研究成果として、まず、対象とした諸構文の背後に広く「イベントの所有」という意味論的基盤を認めることができた。「イベントの所有」とは、通常、個体を所有対象として成立する所有の関係が、イベントを所有対象として適用されたものであり、「人にモノがある」に対し、「人(の身)にコトがある(=起こる)」という、イベント(コト)に対する人の消極的関与を意味する関係のことである。この関係は、 $y$  や  $z$  が個体を、 $s$  がイベントを指すものとするならば、 $POSS(y, z)$  に準じた  $POSS(y, s)$  のような基本関数として定義される。この関数の導入により、日本語の間接受動構文も、英語の have 使役構文も、ドイツ語の自由な与格構文も、その中核的意味構造は以下のように表示される：

$POSS(y, s) \ \& \ V(x, z)(s)$

ただし、 $V(x, z)(s)$  は基底文の述語関係

次いで、このような共通の意味論的基盤に立つことにより、異なる言語間や個別言語内での構文的実現の相違を体系的に捉えることが可能となった。日本語の間接受動構文や英語の have 使役構文では、 $V(x, z)(s)$  に相当する動詞句が受動形態素や have の下に埋め

込まれるのに対し、日本語の二重主語構文やドイツ語の自由な与格構文では基底文に追加された所有関係の所有者  $y$  が、単に主題項または与格項として示されるのみで、接辞や助動詞は関与しない。さらに、ドイツ語では bekommen 受動構文も、「達成・可能」を意味する能動的な場合も含め）潜在的与格項を主語に格上げする操作であり、埋め込みの構造には基づいていない。他方、各構文の生産性について言えば、日本語の間接受動構文や二重主語構文、英語の have 使役構文は極めて高い生産性を示す。これに比べると、ドイツ語の自由な与格構文や bekommen 受動構文には一定の制約が認められる。

最後に、こうした構文の変異をもたらす因子とその相互関連について、形態・統語論的にはとりわけ一致形態論の有無や強さが、意味論的には基底文をなす動詞のアスペクト的性質や文の有題性がパラメータとして関与的であると考えられる。一致形態論は、日本語には見られず、英語においても極めて限定的な現象であるが、ドイツ語では全動詞、全時制・法に及んでいる。この違いに対応するかたちで、一致形態論の存在しない、または弱い日本語・英語においては、イベントの所有者（上掲の意味構造式における  $y$ ）が主語となるのに対し、強力な一致形態論が支配するドイツ語においては、時制や法を抜きにして主語が存在し得ないため、複雑述語化された文においてもなお、基底文の主語（上掲意味構造式の  $x$ ）が主語であり続け、所有者  $y$  は、bekommen 受動構文による格上げを経ない限り、主語にはなり得ない。他方、アスペクトや有題性については、完了的で無題の基底文が「イベントの所有」によるヴァレンス拡大を受けやすいという関係が 3 言語に通底する。ただし、各言語において主題的主語と非主題的主語を区別する方法や程度が異なるのに応じ、当該のヴァレンス拡大表現の分布や生産性に差が生じる結果となっている。

(2) 以上の直接的な成果に加え、副次的な成果もいくつか挙げられる。

ひとつはカタチと意味の関係の捉え方について、従来のセマジオロジックな（=カタチから意味への）アプローチではなく、オノマジオロジックな（=意味からカタチへの）アプローチで一連の成果をまとめたことが挙げられる。すでに述べたとおり、語彙意味論は、通言語的に構文的実現が一定している語彙的使役文に CAUSE のような一定の関数を設定し得たことに大きくその成功を負っていた。しかし、そのような研究が一定水準に達したいま、これまで例外的な扱いを受ける傾向が強くなり、一括し難かったヴァレンス拡大のための諸構文を包括的に捉え、かつ、その背後に意味論的基盤を求め、そこから多様な構文に光を当てていく逆向きのアプローチこそ、発展的で有益なステップになったと考えられる。

次いで、これまでわが国の理論言語学に限定的なインパクトしか持ち得なかったドイツ由来の言語理論の発信を、ある程度積極的に果たすことができたという点にも意義が認められよう。本研究で下敷きにした意味論は、フレーゲに遡るドイツの哲学的伝統を意識したものであり、状況項の採用（例えば、cryのような自動詞が意味するものは「xが叫ぶ」という一項関係ではなく、「xが叫ぶ」という状況sを指すという二項関係であると捉え、このsにあたる項を状況項とする）や演算可能性の重視といった点に、理論的特色が認められる。今日、わが国でよく知られている語彙意味論の枠組であれば、複雑述語はもっぱら関数の中への関数の埋め込みという形で処理されるが、上述のような特色を引き継いだ本研究課題の理論では、ヴァレンス拡大を統語的には埋め込みで表現しない構文（日本語の二重主語構文、ドイツ語の自由な与格構文や bekommen 受動構文）も含めて、より包括的かつ精密に検討・形式化を行うことが可能となった。そして、その結果として、従来行われなかったような言語間の比較・対照が有意義に結実したのである。

最後に、個体とイベント間の所有関係の広範囲な有効性、および対象言語間に見られる相違のパラメータ化の試みを通じ、語彙的反使役の表現とヴァレンス縮小型受動構文の関連は、従来、主要な統語理論において「外項の抑制によって内項が自動的に主語化される」と考えられていたほど単純なものではなく、むしろ意味論・統語論・形態論にわたる構文現象の複合的・連続的展開として捉え直されるものであることが明らかとなった。しかも、この展開は

特定の関数に基づくヴァレンス拡大  
 さまざまな形態・統語的因子による異なった構文的実現  
 脱意味化  
 文法的なヴァレンス縮小

という線を迎ると考えられる。この点で、本研究は、従来、主として単語ベースで通時論的な観点から組み立てられてきた「文化化」理論を、構文ベースで共時論的な観点から相対化するという新たな視点を提供するものともなった。こうした言語普遍論研究に繋がり得る成果が得られたことにもまた、本研究の意義が認められるだろう。

##### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

FUJINAWA, Yasuhiro: “*bekommen* + Partizip II als Antikausativ. Was uns seine Polysemie über Passive und verwandte Phänomene lehrt.” 査読有、

*Beiträge zur Generativen Linguistik* (ed. by Japanische Gesellschaft für Germanistik), 2014, 54-73.

〔学会発表〕(計9件)

FUJINAWA, Yasuhiro: “Einstellungsbekundung und Verbmodi mit besonderer Rücksicht auf den Konjunktiv II im Deutschen und seine japanischen Entsprechungen.” International Workshop “Japanese-German contrastive studies on the interaction between structure and function – main focus on modality (sponsored by JSPS and DFG)” (2013年9月27日、北海道大学).

藤縄康弘:「反使役としての bekommen + 過去分詞」日本独文学会 2013 年度春季研究発表会シンポジウム「変容する「ヴァレンツ」 文法論と辞書論の接点を求めて」(2013年5月25日、東京外国語大学).

今泉志奈子:「日本語動詞における語彙的意味と形態のミスマッチ 「試合に出る」「シュートを外す」を例に」日本独文学会 2013 年度春季研究発表会シンポジウム「変容する「ヴァレンツ」 文法論と辞書論の接点を求めて」(2013年5月25日、東京外国語大学).

藤縄康弘:「ドイツ語与格の統語論と意味論」新潟大学人文学部言語学研究会 (2013年3月27日、新潟大学).

FUJINAWA, Yasuhiro: “Zur Kodierung situationsinterner und -externer Possessor im deutsch-japanischen Kontrast.” Konferenz zur japanischen Sprachwissenschaft (2013年2月15日、エアフルト大学(ドイツ)).

FUJINAWA, Yasuhiro: “*Bekommen* + Partizip II in der modalen Lesart: Was das uns über das Passiv lehrt” 日本独文学会第40回語学ゼミナール (2012年8月29日、湘南国際村 IPC 生産性国際交流センター).

藤縄康弘:「人称受動と非人称受動のあいだ:ドイツ語を例に」東京外国語大学語学研究所定例研究会 (2012年1月25日、東京外国語大学).

藤縄康弘:「受動化とアスペクト性」東京外国語大学国際日本研究センター対照言語学部門第5回研究会 (2011年12月17日、東京外国語大学).

IMAIZUMI, Shinako: “On affectedness and possession in the semantic structures of predicates in Japanese.” Linguistics Association of Great Britain Annual Meeting 2011 (2011年9月9日、マンチェスター大学(連合王国)).

〔図書〕(計4件)

- 今泉志奈子：『簡略英語学・言語学用語辞典（仮）』（分担項目執筆），開拓社，2014 出版予定〔掲載確定〕総頁数未定．
- 今泉志奈子・藤縄康弘：『複雑述語研究の現在』岸本秀樹・由本陽子〔編〕「事象の所有と複雑述語」(分担執筆)，ひつじ書房，2014，464 頁．
- 藤縄康弘：『講座ドイツ言語学第1巻 ドイツ語の文法論』岡本順治・吉田光演〔編〕第5章「受動態と使役」，第7章「自由な与格」(分担執筆)，ひつじ書房，2013，283 頁．
- 今泉志奈子・井上彰：『スヌーピーの英語塾 Let's Study English with Prof. SNOOPY』英宝社，2013，96 頁．

〔その他〕

- 図書 が日本独文学会誌『ドイツ文学』148号(2013)の書評に取り上げられた。本書全体について、「[文法的な諸特徴を解き明かす『面白さ』を理解してもらうという]目標は十分に達成されていると思う」と評価された上で、研究代表者が分担執筆した部分についても、能格性についての解説が「とても分かりやすく書かれている」、「本章の与格の分類の概観は参考になる」など、好意的に受け止められた。

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤縄 康弘 (FUJINAWA, Yasuhiro)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授  
研究者番号：60253291

(2)研究分担者

今泉 志奈子 (IMAIZUMI, Shinako)  
愛媛大学・法文学部・准教授  
研究者番号：90324839